

プロレタリアの戦略戦術

まえがき

われわれの戦線における一般的戦略、戦術の確立が、特に緊迫した今日の社会状況の中にあつていかに必要であるかはいまさら説くまでもない。この種の理論がいままでほとんど発表されなかつたことは、われわれの運動の全面的進出を遅らせた大きな原因の一つであろう。だが今やわれわれは本書によってわれわれの戦略・戦術確立の第一歩を踏み出した。

本書に展開された理論は必ずしも完璧とは言われぬ。否むしろ多くの未完成な点を含んでいゝ。従つてこれはわれわれの動向を決定づけるものではない。これは一個の素材である。全運動分野の同志諸君が、より果敢なる実践と、より真摯な検討を通じてこの素材を鍛錬する時、始めてわれわれの全戦線の動向を決定する基礎理論は完成されるのである。それ故に、われわれの戦線の飛躍的發展のために本書に対する活発なる批判を展開されんことを切望する。

編集者

最初の世界戦争であった一九一四年から一九一八年に至る世界帝国主義戦争は、帝国主義列強による世界の再分割の過程であった。その結果、ロシアと戦敗諸国における革命とウイルソンの民族自決主義による諸小国が出現した。社会民主主義者の政府は多くの国に出現したが、その政策は帝国主義者の政府と等しく全く帝国主義が自らの行なった戦争の後始末をつけようとする努力の現れに過ぎなかった。

帝国主義者は戦後十数年間、自らの行なった戦争によって起こった政治的、経済的混乱・恐慌を克服しようとして努力し続けた。生産の決定的部分を支配している帝国主義的金融資本の要求は、強力による統制経済の実施となった。そして帝国主義者の見出した政策は、経済的国家主義とファシズムとであった。この最新のそして極端な政治的経済的国家主義は、世界資本主義の現状である。その形態がどんなに異なっていようと、その底を貫くものは最新の国家主義である。「死滅に瀕した資本主義」は最後の断末魔的攻撃を、その敵、労働者・農民に向けている。反動的時代はかくして近來ますます色濃くなっている。

政治的経済的国家主義は何故に起こって来たか？ 戦争中に抬頭した後進資本主義諸国の生産諸力の発展と戦後復興したヨーロッパ諸国の生産力とは相合して、いわゆる生産過剰という現象を生んで恐慌を勃発させた。その結果は生産物価格の低落、生産制限、失業者の激増、農村恐慌による農民の窮乏化、ストライキの昂まれる波と一般的不安とを生んだ。ヴェルサイユ条約によ

る老なる賠償金はドイツから連合国に流入し、それはアメリカに対する戦債としておびただしい「金」が欧州から合衆国に向かって流出して行った。世界の「金」の大部分はアメリカに偏在した。その結果金本位制を維持することは出来なくなつて、通貨政策の世界的な破産となった。ヨーロッパは「金」の欠乏で、アメリカでは皮肉にも余りにも多量なる「金」のために金本位制を停止して為替の調節をはからねばならなくなった。

各国は自国の生産を防衛するために、尖鋭な貿易戦を展開した。その結果は関税の障壁を互いに高く構築するに至つた。各国はもはや国際的協調によつては、自由放任主義によつては自国の経済的独立をさえ維持することは出来なくなつて、他国を犠牲にしてもその防衛をはからねばならなくなった。「武装平和」の状態が出現し、幾度となく開かれた軍縮会議は一応の安定を得てもその翌日には次の衝突と条約の廃棄と修正とを予想させた。世界経済会議のあつけない決裂は、すでに国際的協調を図るにはあまりに各国の利害は衝突していること——戦争の危機——を示したのであつた。すでに始められていた経済国家主義が、これによつてますます帝国主義政策としては不可欠のものであることを示すに至つたのである。

帝国主義列強の互いの利害の尖鋭な対立と同時に、帝国主義列強は国内的には恐慌、ますます増加する失業者群、独占資本主義の一層の拡大と農村の全面的な破滅、中産階級及び中農のプロレタリア、貧農化、等々の不安な状態を等しくつくり出している。これらの状態は、国家主義的強硬政策が、その外交においても、内政においても、軍事においても、帝国主義政策の中心となる原因をつくり出したのであつた。帝国主義者は内憂外患を切り抜けるためにこの政策によつて

人民の目を、自己の現実の悲惨な生活から対外的状態に転向せしめようとして、一石二鳥的効果を獲得しようとしたのであった。

世界帝国主義の唯一の政策たるブロック結成による統制経済とファシズムは、各国に種々なる形態を持って現われている。これは戦争による世界の再分割のための必然的な動向である。英国の拳国一致マクドナルド内閣は本国と各植民地、自治領との間に最惠条約および以上の強固なる結合を図るために、オタワ会議を開いて本国金融資本の制覇の確立のために活動した。フランスは大ゲルマン帝国を夢想して抬頭せるナチスドイツに対抗するために、ポーランドおよび中欧諸国を抱き込んでいた。ドイツとイタリアとフランスとは互いに欧州大陸制覇のために陰に陽に闘争しているのである。そしてロシアを除く欧州大陸は多かれ少なかれこの三個の帝国主義国に支配されている。北米合衆国は南北アメリカブロックの政治的経済的中心である。英領カナダの位置はイギリスブロックにとつては頭痛の種である。一九三一年に日本帝国主義によって始められた満州強盗戦争によって建設された満州国と日本はブロックを形成した。かくして列強の間の尖鋭な対立が激化されている。

かかるブロックによる独占資本主義統制経済は、トラスト資本および銀行資本、コンツェルンによる産業の決定的部分の支配をより拡大し、強化することであった。恐慌を通じて資本の集中は異常に拡大され、その負担は労働者農民の肩に転嫁された。失業者の激増はこれを物語っている。だが、かかる統制経済は来たるべき世界革命においてその管理、統制権を労働者農民の手に移行せしむべき準備を切り開いているのである。イタリアにおける国家的組合主義も、ナチス

の統制経済も、ルーズベルトのN・R・Aも等しく金融資本の要求が決して労働者農民の要求とは両立しないこと、かかる統制主義が労働者農民に対する弾圧とより一層の窮乏化とを結果していることは、統制経済に対するブルジョアジーの無能を暴露した。あらゆるブルジョアの統制主義が失敗を暴露した。そして私有財産の強力な支柱なる本質を表面に表わした。かかる生産手段の私有制と生産方向の社会化との対立は、必然的に生産手段の社会化によってのみ解決の道を見出しうるのである。

経済的国家主義に対応するファシズムも、各国の歴史的社会的諸条件によってあらゆる形態をとっている。最新の経済的国家主義は国際的対立の尖鋭化、恐慌による労働者農民の憤激の増大と階級闘争の激化とを含んでいるがために、強力なる武力的政策をとらざるを得なくなつて、強大なる組織的暴力の發揮を伴っている。ブルジョアジーの組織的独裁制はファシズムの一特質である。それはブルジョアジーの独裁の異常なる、そして露骨なる拡大強化である。議会主義によって陰蔽されていた独裁は、ファシズムによってその本質を暴露したのである。

イタリアがファシズムの名を最初にとつた不名誉は、戦後における革命的闘争の時代にブルジョアジーの混乱せる力に対して、労働者農民の結合による強固な前衛を持たなかつたことに帰因するのである。ブルジョアジーはわずかに優越せる力を、労働者農民がその力を結集する前に武力的に粉碎することに成功した結果であった。ドイツのナチスは、多少の社会主義的綱領とヴェルサイユ条約廃棄とによって、労働者農民を鎮圧するためのクーデターに成功の道を切り開いた。しかしいわゆる清党運動はナチスのブルジョアの本質を暴露したのであった。イギリスの拳

国一致内閣、ルーズベルトの政府も、ファッショ的動向を進みつつあるのである。満州事変以来の日本の政府は挙国一致の名によってファッショ化的動向を明らかにした。

ファシズムは明らかに一時的にはあるが、ブルジョアジーの攻撃の勝利を示している。そして労働者農民運動への弾圧、組合の政府による統制、分裂主義、社会ファシストの養成、より広汎に労働貴族の買収という政策を等しく伴っている。ファシズムは国家的対立をより激化した。日本及びドイツの国際連盟脱退、軍縮条約の廃棄以来、防空演習、軍事演習はいたる所で行なわれ、軍拡競争はすでに日程にのぼっている。世界帝国主義はかかる政策によって戦争を準備し、革命への転化を防止せんと狂奔しているのである。

日本帝国主義が満州において開始した戦争以来、第二次世界帝国主義戦争は既に始まろうとしている。戦争によって起こされた恐慌を克服せんとしたブルジョアジーはそのためにより戦争に直面させられたのである。このことは恐慌からの血路は、ただ必然的に起こる戦争を内乱にまで転化することによってのみ見出されることを示している。

国際連盟が満州事変にも、その後の上海北支における諸事件にも、ヒットラーの爆弾宣言、ウルグアイとパラグアイの戦争にも、また最近のイタリアのエチオピア征服欲にも平和的解決の道を見出せないほどの無能に陥ったことは、戦争をも敢えて辞せざる連盟加盟・非加盟の帝国主義諸国の意志表示なのである。アメリカとソヴェートを加盟せしめんとしている努力も、少しも戦争の危機を緩和し得ない。

今日戦争の危機は日本とドイツにおいて最大である。支那の分割、ソヴェートの破壊は世界帝

国主義の要求である。そのために少なくとも何処においても始められようとも戦争が始まれば世界のすべてではなくとも、大部分の国は戦争の渦中に引き込まれることは明らかである。そして未曾有の惨虐な大衆的殺戮が続けられるであろう。だが来たるべき戦争は、かつての世界戦争以上に国民戦争として現われるであろう。このことはより以上に国民一般の生活の悲惨、破壊を伴うと共に特殊なる常備軍から国民一般の武装への道を開くのである。すでに各国は防護団の名において人民の武装を準備しているのである。このことは戦争によって対外戦争を内乱へ転化せしめる第一歩を準備しているに他ならないのだ。それ故に世界帝国主義はその支配の維持のために採用する一切の政策によつてますます自己の墓穴を掘り下げているのである。そして戦争は鋭い階級闘争を展開し、世界的革命の門戸を切り開くであろう。

(二) 日本帝国主義及び来るべき革命の展望

日本帝国主義によつて開始された全軍事活動は世界戦争の開始を示した。そしてこの軍事的進出は突然はじめられたものではなく、日本資本主義の発展と共に生長し、日本帝国主義の拡大強化のための必然的な事件であったのである。日本資本主義の一特質は、戦争によつて飛躍的に発展したことである。天然資源に乏しい日本の帝国主義的発展は、ただ植民地掠奪と戦利品とをその源泉としてなされ得たのである。海外資本主義の攻撃から第一の刺戟剤をとり入れていた、半封建的官僚によつて指導されていた明治政府は、日本の不平等な地位の撤廃のための闘争を、隣接せる弱い民族を掠奪するための闘争という形態によつて開始した。それは日本帝国主義への道

を開いたのであった。一八九五年に朝鮮を支那から独立せしめ、台湾を占領し、支那に三億五千万円の償金を課した。義和団事件を日本帝国主義は掠奪に利用することを決して忘れなかった。一九〇四年の戦争の結果は、ロシアの勢力を南滿から駆逐することに成功し、南滿鐵道とその附属地、関東州を掌中に収めた。その後、朝鮮を完全に植民地化せしめ、世界大戦に際してはその生産の大拡張を行なって、戦争に全精力を集中せる欧州諸国の東洋における市場へ侵入した。一九一五年は支那の植民地化を示した二十一カ条の有名な要求を提出した。一九二二年のワシントン会議においてアメリカの圧迫によって要求の大部分を放棄し、山東から撤兵したが進出の企図を全く放棄したのではなく、待機の状態をとるに至ったのである。そして官僚中の最も有力な、かつ実行的な軍部の力をこれに集中せしめたのであった。滿州、上海における諸事件はこの勃発に過ぎないのだ。

日本帝国主義の進出は至るところで世界の帝国主義列強の利害と衝突をひき起こした。しかし各国が断乎たる反対を浴せないのは、各国の利害もまた鋭く対立しているからである。アメリカもイギリスもフランスもドイツも、いずれの国が支那を独占しようとも決定的に反対すると共に、その分割を望んでいるのである。

日本帝国主義の全軍事活動は、かかる状態を利用すると同時に日本資本主義の軍事的特性とその軍事的冒険主義とによって説明される。より強固な経済基礎を作り、原料資源特に軍事工業および軍需品のための原料資源を奪い、東洋における優越せる地位を固めんとするために、支那の植民地化、あるいはその大部分の植民地化は一貫せる日本帝国主義の要求であった。これは原料

資源に乏しいために日本資本主義の一特質が異常なる軍需工業中心であることによって必然的であった。日本資本主義は戦争によって発展し、軍需工業を異常なまでに拡大し、次の戦争でより以上の発展を遂げたのであった。

日本帝国主義によって始められようとしている戦争の危機は、最近の非常に広汎なかつ深刻な恐慌で激化された内部的諸矛盾の尖鋭化と結びついている。国内市場を狭隘に導いている封建制の残存勢力の強力性、農民に対する半封建的搾取、プロレタリアに対する植民地的な搾取等が、農業恐慌と工業恐慌とを結合して、未曾有の激しい形であらわれたのである。資本家地主は植民地領有および市場獲得——主として支那に向けられる戦争——によって民族運動を抑圧し、支那民衆搾取に資本主義の活路を見出さんとしているのである。

始められようとしている帝国主義戦争は、また反動の強化と緊密に結合している。滿州事変がいわゆるファッショ的反動時代を開始する進軍ラッパになったことは、この事を明らかに物語っているのだ。労働者農民に対する天皇制による圧制、農村における農奴的抑圧の強化は、大衆の生活水準のより以上の低下を支配階級が企図していることを示しているのだ。

これらのことは、戦争に対する闘争およびファシズム粉碎のための闘争という重大な任務をわれわれに課するのである。そして支那国民の頑強な、執拗な抵抗——国民党政府の親日転向も決してこの抗日運動を弾圧し得ない——と、日本の大衆の窮乏化は日本帝国主義の全軍事計画の失敗のための基礎を示しているのである。それ故にこそわれわれに課せられている前述の任務は極めて重大である。

かくのごとき条件の下においてわれわれの任務遂行には、国内における諸階級の力的関係および日本資本主義の動向、来たるべき革命の展望に関する正しき理解を必要とするのだ。そのためわれわれは日本の支配的制度の本質を分析しなくてはならぬ。そしてそれを貫くものは独占資本主義の著しく進んだ発展と封建制の異常なる強力な諸要素の残存である。

第一に挙げられるものは、絶対主義的支配である。それは稀に見る無制限な統帥権を掌握して、勤労階級に対する抑圧と専制支配のための官僚機関を握っている。人民支配の強化のために最近に至っては、その上から与えられた似而非立憲的形態の粉飾を著しく落として表面に押し出して来た。機関説を支持していた自由主義者は没落し、議会および政党内閣も決して独自の天皇制から独立したブルジョア国家形態ではないことが支配階級の間でも確信されるに至った。これは官僚、軍部の政治的進出の結果であった。彼らの封建的野蠻な支配への転向はかくして説明される。そして国内の政治的反動、家長的家族制度、特殊部落等の封建制残存物の維持は絶対主義制によってなされている。

日本の絶対主義制は一面において大土地所有者としての地主であり、一面において国家資本の私有者としてのブルジョアジーである。それが帝国主義ブルジョアジーと政治的に妥協し、その政治的支配の表現として存在して来たのは、かかる階級の性質によるのである。その上、日本資本主義が戦争によってのみ発展したことは官僚、特に軍部の役割を強化する原因であった。帝国主義ブルジョアジーは官僚を支持することによって、発展し富むことが出来た。そして大衆の間起こった帝国主義ブルジョアジーに対する憤激を今度は絶対主義を表面に押し出すことによ

て、官僚と妥協することによって弾圧しているのである。

日本におけるファシズム、帝国主義戦争は、官僚と帝国主義ブルジョアジーとによって行なわれるところの資本主義の恐慌からの活路として採用されている。ファシズムはその根柢を絶対主義に見出している。絶対主義を表面に押し出し、美化し増大する反動の重圧と戦争の危機に対する反対を隔着し、官僚に対する消滅しつつある幻想の維持につとめることをファシズムは主要な任務としているのである。

第二に、土地所有形態——農村における半封建的支配である。日本における地主は全耕地面積の四割以上、およびその最良の部分を持っている。そして農民の大部分は小作農および貧農である。しかも地主は小作農に対して総収穫の五割ないし六割を強奪しているのである。そしてこの農奴的な支配制度は、高利貸資本や土地抵当債務やトラストの独占価格や異常に巨額にのぼる公租公課によって維持されている。最近の農業恐慌は、土地を銀行資本の手中に異常に集中していた。これは小農及び貧農を決定的に金融資本と対立せしめたのである。

第三は独占資本主義である。世界戦争およびそれに続いた恐慌の過程において資本は金融王の手中に集中していった。資本主義的コンツェルンは、日本の産業の決定的部分を独占した。銀行資本と産業資本との巨大なる従断的コンツェルンの形態は日本においては、他の帝国主義列強よりも、より強固に融合しているのである。三井、三菱、住友、安田等の有力なる巨大コンツェルンは、日本の資本主義的経済の支配者である。そして彼らはあらゆる方法で緊密に官僚と結合し、その帝国主義政策を強行しているのである。いかに官僚が抬頭したとはいえ、金融王の要求

は強行されている。満州国を、王道楽土の建設金融資本の排撃と宣伝し瞞着した軍部も、その経済建設の時期には投機的利潤追求の金融王達の政策を阻止する事は出来なかつたことでも示されている。

日本資本主義は他の資本主義国と等しく、労働者の搾取、農村に対する掠奪、戦利品、国家財産の横領（疑獄事件を見よ）、植民地民衆に対する奪掠等によって富んできた。そしてそれは封建的な官僚の抑圧の援助の下に大きくなって来たのである。その特徴は、冶金業、機械製作工業の発展に比して、最近では軍需工業が発展しつつあるけれども、軽工業、特に繊維産業が優勢であることである。労働者の高い労働生産性と植民地的な労働条件である。労働者の賃銀や労働時間の植民地的水準、繊維労働者および鉱山労働者の間における奴隸的寄宿制度が広く行なわれていること。人身売買や少年および青年の労働に対する強度の搾取や労働者保護の施設や法律の絶無等は、労働者が無権利に生活していることを示している。家内工業や小手工業が有力に残存していることは労働者一般の生活水準を押し下げ、金融資本の搾取を維持する根源である。かかる日本の支配制度は、日本における革命運動が帝国主義戦争反対、官僚主義反対、金融資本制覇反対、労働者の生活水準の向上、政治的権利の獲得、土地私有反対、農民に対する半封建的搾取・高利貸的隷属反対のための闘争を戦い抜かねばならぬことを示しているのである。

かかる闘争は、ただ労働者農民革命の勝利によってのみ戦い抜かれるのである。かかる闘争は、今日からその日まで戦い続けなければならないのである。そのために来たるべき革命におけるわれわれの主要なる任務は次のごときものである。

一、封建的残存支配の撤廃

二、大土地所有の廃止

三、労働者農民による一切の生産管理

かかる任務をわれわれに課するところの来たるべき革命の性質は、当然労働者農民革命である。それ故にわれわれの集中的な煽動スローガンは、「帝国主義戦争に反対し、封建的残存官僚支配を打倒し、米と土地と自由のための、労働者農民の社会統制のための労働者農民及び人民一般の革命」でなければならぬ。なぜなら、労働者農民の勝利は官僚的支配はもちろん、いかなるブルジョア的地主的支配をも、その中央から地方から、彼らの権力を一掃し去った時にのみ、彼らの組織的攻撃を打破すべき、労働者農民の組織的軍事的勢力の集中を確立した時にのみ獲得されるからである。

かかる集中的煽動スローガンは、後述のごとき（十章を見よ）当然の行動スローガンによる闘争において実践される。そしてかくしてのみ日本における一切の革命的諸勢力、労働者農民貧民をわれわれの側にひきつけうるのである。

革命の中心勢力は、労働者、貧農、中農である。これらの中心勢力は同一水準に立つて結合しなくてはならない。プロレタリア・ヘゲモニーの思想は、貧農および中農が自己自らを解放する力がなく、また組織し得ない点をあげるのであるが、労働者もまた貧農及び中農と結合しなくては自己を解放する階級戦の勝利者たり得ないのである。大農は、銀行資本の搾取に参加して農民大衆の土地欠乏と耕作権剝奪とを利用して、支配階級の地位に立っている。「耕す者に土地を

！」のスローガンは大地主の土地にのみ向けられてはならない。現在の小作争議が、その大多数が中小地主に対して行われていることによっても、大地主のみに向けられることの誤謬を示している。中農たる自作農は、今日においては銀行資本によってほとんど土地を奪われている。これは農村において貧農および中農の結合が進められる可能性を示すのである。このことは革命的前衛の組織が労働者、貧農、中農の同一水準における結合の上につくられることによってのみ最も強力となり得ること、真実の前衛たり得ることを示しているのである。

(三) 最近の諸運動

経済恐慌と戦争によって強化された資本家地主の労働者農民に対する攻撃に直面して、労働者の経済的闘争と地主に対する農民の闘争はますます激化している。

最近多くの社会民主主義者の側から、労働者、農民の闘争は一路沈滞の方向を辿っていると云われている。そして満州事変以来このことは百万遍となく繰り返された。だが事実は全く逆である。彼ら一連の敗北主義者の根拠は、労働者運動を労働組合運動にすりかえたのである。なぜなら、彼らこそは労働者の運動を幹部のみの駆け引によってみることに習慣づけられているからである。労働者運動を労働組合運動とのみ見ることはまったくの誤りであり、かかる観察から労働者運動の沈滞を結論づけることは明らかに革命運動の沈滞を宣伝し、労働者の戦闘的精神を去勢せんとする裏切りなのである。

もちろん、労働組合運動は満州事変以前に比しては全く沈滞したのである。革命的労働組合

は、弾圧とその方針の誤謬とによってその力を減殺された。全国自連はわずかに印刷および金属労働者の間にその組織を持つに過ぎない。全協は少数のグループと化して今だに全国的中央部を持つていない。合法左翼と称せられている全国評議会は、その組織の拡大ははかばかしくはない現状である。しかも合法左翼と称する社会民主主義幹部は、ひたすら大衆の革命化の防圧にのみ努めているのである。東交や、東京市従や、大阪市電等の単一組合は、組合内部で左翼も右翼も中央部争奪の闘争に力をそがれている。これに反して、右翼労働組合は総同盟と全国労働の合同によって一大組合を誇ってはいるが、組合員大衆の左翼的傾向を幹部は極度に恐れている。その合同に現われた大阪における港南労働者合同促進協議会は、明らかに幹部の分裂主義への反対の意志表示であった。この合同は大衆の要求を庄殺するための幹部の駆け引きであった。「大産業奉還」というスローガンは社会主義面貌を持った最も巧妙な裏切りである。彼らはこのスローガンによって、労働者が封建的残存勢力と闘うことを阻止したのである。海員組合の間にも左翼反対派の活動は拡大している。

帝国主義列強に比して極めて低率にある労働者の組織率が帝国主義日本の現状であるのは、一般に労働者の生活水準が植民地的に低いにもかかわらず、家族制度の残存物がその組織化を阻止しているのである。そして大産業および国家資本の下に在る産業、製鉄、国鉄等の労働者が、右翼労働組合あるいはファシストの指導下に陥っていることは、労働者の生活水準を高めことを阻止する重大な原因なのである。

右から左までの社会民主主義者、社会ファシストが、満州事変以来絶えることなき露骨な裏切

りをしているのは、例えばリーダーを分裂せしめたこと、戦線統一に対するサボタージュ、あるいは直接の妨害等は、軍需インフレーションによって、彼らが金融資本に買収されたことと、社会民主主義が労働者を決定的に裏切る、その本質からの当然な仕事であった。

左翼社会民主主義者も、右翼総同盟の幹部と同一である。彼らの革命的言辭が意識のハッキリしない、それでいて生活に窮乏せる労働者、自由労働者、軽工業労働者の間にその勢力があるのは、かかる言葉だけの革命的粉飾に幻惑されたがために他ならない。彼らの革命的言辭は、決して本当のものではない。戦線統一に対して、彼等は工場、経営の闘争を中心とせずして右翼と同じく幹部の駆け引きという、裏切りの方法をとっているのである。しかも、組合員大衆を不断に革命的スローガンの周囲に集中するように説得の手段をとることをあえてサボっているのである。帝国主義戦争反対に対しては注意深く避けているのである。

かかる労働組合の現状に反して、労働者の間からは自然発生的なストライキが起こっている。その要求は高まりかつ頑強となった。それは経済恐慌と戦争とによる資本の攻撃に対する個々の防衛闘争として始まっているのである。だが現在存在する労働組合は、この自然発生的なストライキを組織化し、全国的なストライキにたかめることは出来ないでいる。労働者は労働組合の無力よりも、より前進しているのである。そしてその後から労働組合がついていっている。このことは大阪機械製作所、荏原製作所のストの惨敗が最もよく物語っている。

官庁統計によるストライキ数や参加人員は減少しているかもしれない。参加人員の減少は中小工場の閉鎖によるのであるが、これは恐慌がもたらした大資本による中小資本の没落が示す一傾

向なのである。軍需インフレも決して労働者の生活水準を高めなかった。実収賃銀はわずかにたかめられたが、これとても労働時間の無制限な延長によるもので定額賃銀はむしろ低落の傾向にあり、これに加え、物価の騰貴がその逆の結果を導いた。

われわれの任務は、個々の自然発生的なストライキの波を全国的に組織すること、戦線統一をかかるストライキのなかで闘うことではなければならない。

労働者運動の高揚と同じく、農民の闘争はより著しく激化している。その闘争は文字通り血みどろの闘争である。中農は銀行資本のために土地を失っている。小作農は耕作権をさえ奪われている。小作争議を調停や法廷の判決によって解決していた誤謬は清算されようとしている。最近の京都府の暴動はこの農民の闘争がすでに蜂起の形態をとり出したことを示すのである。かかる傾向は一、二地方の特異的な現われでなく、全農民の動きの上に示されており、「耕す者に土地を！」のスローガンの正しさはここに明示されている。

特高課の仕事が、小作争議の予防を主要任務とし始めたことは、いかに農民が追いつめられて蜂起によって、実力によって、その悲惨な生活の局面を打開せんとしているかを物語っている。東北地方の慢性的飢饉、九州、中国、近畿地方におけるたびかさなる水害等は、農民をして蜂起に赴かしめようとしているのである。

支配階級及び社会ファシストは、農民の闘争を産業組合によって中農を支配階級の側に組織しようとしている。中農はそれ自身としては、革命的勢力とはなり得ないために産業組合の運動がはじめられるのである。しかし銀行資本による土地の掠奪は中農をより貧農に近づかしめ、その

同盟の結成を進行させる。産業組合における戦闘分子の活動は、かかる基礎を主として持っている。しかるに、農民組合たる全農は誤れる方針と社会民主主義者の裏切りによって、貧農、中農の組織を決定的に闘いとりに得なかつた。法廷戦術の誤謬、議会主義は、農民闘争によって清算されようとしているが、そして「土地を農民へ！」のスローガンは一般的に普及したけれども、大衆の自然発生的な蜂起的闘争を指導することは出来ないでいる。そして個々の闘争を防衛し組織することは出来ないでいるのである。「労働者と農民の同盟」のスローガンも普及した。これは銀行資本が農村を支配すればするほど、このスローガンの意義は強まっていくのだ。そのために農民委員会のためのアジ・プロは最も必要である。

日本において極めて重要な要素である漁民の間には、未だにその組織を持っていない。農民と漁民との間のこの跛行的現状は急速に克服されなくてはならない。封建的残存力支配の強烈な日本においては水平社闘争はきわめて重大である。ここでも高知県の差別事件、軍隊内差別問題等における闘争も、大衆の戦闘的精神は、社会民主主義幹部によって法廷と請願にすりかえられた。その大部分が労働者農民である水平社の闘争は部落における経済闘争と結び付けて闘われるべきである。しかるに幹部は常にこの結合を極度に恐れ、単なる道徳的請願に期待しているのである。水平社の闘争は、労働者農民の間に根強く残っている封建遺制との闘争と結合してのみ勝利の日を期待し得るのである。これらの批判の上に立ってわれわれは、労働者農民漁民水平社における部分的要求スローガンを作成しなくてはならない。

唯一の革命的党派たるわれわれは、大衆運動を指導してはいない。しかも指導すべきわれわれの

間に、すなわち前衛の組織さえつくられてはいない。そして個々のグループ、各分野の闘争でさえ、緊密な結合による、系統的な、統一的な方針さえ確立されていないのである。

「自由連合新聞」がその指導の中心的機関紙としての役割を持っているし、また持たねばならぬにもかかわらず、かかる意義さえ、アナキスト同志の間に確立されていないのである。「新聞」はただ道徳的な影響を、しかもわずかに持っているだけであって闘争に不可欠の意志の統一を具体化してはいないのである。かかる現実を克服しない限り、前衛を組織することは不可能であり、昂揚しつつある大衆の闘争を後から跛をひいて行って行かなければならなくなってしまうのである。それ故、われわれの緊急の任務は、まず前衛の組織を確立することにある。

共産党はかつて大衆運動を指導したが、コミンテルンの指導に盲従し、天皇制に対する闘争によって没落を早めてしまった。われわれは天皇制をロシアのツァーと同一視する誤りを犯してはならない。ツァーは農奴制支配の集中的表現であった。あらゆる暴虐も、搾取も、すべてツァーの名によって、ツァーに集中された。だから大衆の憤激は直接ツァーに向けられ得たのである。しかるに日本の天皇制はそのブルジョア地主的本質を持つにも拘らず、その土地所有と富は三井、三菱よりも老大であるにもかかわらず、直接に大衆への搾取的資本として前面に押し出されていないために、直接的目標とはなり得ないのである。またこのことは歴史的、民族的神話化した日本民族の特殊性によることとがさぶる重い比重をなしている。それ故に現在当面するわれわれの任務はかかる天皇制に向かって闘争を集中することではなく、むしろ金融資本支配に集中されねばならないのである。

(四) 全国自連批判

全国自連の現状とその弱点は、組織率の低いことと闘士の欠乏である。全協が犯したセクト主義的偏向にわれわれは絶対に反対し、全国自連をその思想的、道徳的相違を超えた経済的大衆団体として維持することに努めなければならぬ。かつての偏向は清算されようとしている。ストライキに際して個々の工場主に対する憤激を、経済的組織に向ける方針が充分にとられていない。個人が悪いとすることは一種のセクト主義である。その最悪の現われはフラクション活動に現われ勝ちである。例えば総同盟は幹部がダラ幹部だから脱退するという組織方針は誤りである。それはやはりセクト主義である。かくすることは当該組合大衆を正しい路に導いても、他の総同盟内に残存する大衆をわれわれの側にひきつける線を切りとってしまうことである。これは一種の敗北主義だ。闘士の欠乏は致命的である。全国自連は急速に優れた組織者を養成しなければならぬ。かかる方策をとらないで、ただ組合の仕事を一、三の先進分子に一任するなど言っていることは単なる空掛声に終わってしまうのであるし、また現在まで終わっているのだ。それ故に組織者を系統的に養成する特別の委員会がつくらねばならぬ。教育部のみに一任することは誤りである。

われわれは全国自連の合法性をあくまで守らねばならぬ。だが現実のわれわれのもつ合法性は、甘やかされた合法性に過ぎない。それはわれわれを非合法活動から遠ざける支配階級の方針に合致してしまうことである。もちろんわれわれは秘密活動を戯んではならぬ。これは重要なこ

とだ。だが闘士は革命の仕事が温い合法性のなかで進展するという誤りを犯してはならぬ。前者はこの誤りよりはむしろ微小なる誤謬である。

われわれの間に今だに存在するルーズ性は、かかる甘やかされた合法性の産物である。卑近な例をあげるならば、時間の厳守、集会に対する出席の義務観念等の欠乏はその現われなのである。かかるルーズ性をさえ克服し得ないならば、われわれが革命的党派として数百万の大衆の先頭に立って闘うことなどは思いも及ばないことである。

ルーズ性は、全国自連の組織形態からも生まれている。熱情的な尖鋭分子には強制によらぬ活動を期待することも出来るが、意識のおくれた大衆にまで「自由連合と自由合意」との美名に隠れて、その自発的活動を要求することは誤りである。全国自連は常任委員とその規律を持たねばならない。これに反対する者は十人、二十人の闘争は指導出来ても何百万の労働者を指導することは出来ないし、またかかることはそうした要さえ持たない人々の言葉に過ぎない。

(五) 闘う農民批判

われわれは農民の大衆的闘争を指導していないし、その機関さえ持っていないのである。個人の影響下の部落や全農内フラクションを持ってはいるけれども、その系統的な指導をしていない。「闘う農民」はかかる意図によって発行されたのだけれども、未だに「自連新聞」の附録の型を脱し得ないでいるのだ。この立遅れの克服は緊急である。そのために「闘う農民」が農民闘争の系統的な指導機関紙となるための諸方策が立てられねばならない。特定の通信員、全農、日農、

産組内のフラクションの統一的な結合、個々の部落との結合、その上に立つ特別な委員会が「闘う農民」の発行者とならねばならぬ。

「耕す者に土地を！」のスローガンは正しいのである。このスローガンのもとに闘争を組織していかねばならない。しかも農民の自然発生的闘争の先頭に立たねばならない。蜂起的状態を持つ農村の誤りなき指導は前衛の農民委員会の結成によってのみ遂行されるのである。

漁民の間への煽動宣伝は全くなされてはいない。土佐の漁民蜂起におけるわれわれの輝しき伝統は、闘争によって生かされなければならぬ。そのために特別の機関を必要としている。

(六) 水平社運動

封建的残存支配の極度に強い日本における水平社の闘争の重要性はすでに述べた。この闘争を指導するためには、全国水平社の中央部をわれわれの手に闘いとらねばならぬ。そのために全水の活動を労働者の経済的闘争および地主に対する農民の闘争とに結合せしめることが必要である。それを成功的に遂行するためには全水の革命的反対派の結成こそ重要である。

ややともすれば武力的闘争に移るところの水平社闘争を、法律にたよるようにならねばならぬ。むしろ逆にわれわれこそかかる闘争の先頭に立つべきである。そしてそれは常に封建的な身分制の打破は、ただ資本主義的な階級闘争によってなしうることをアジ・プロシなくてはならぬ。

(七) 文化運動批判

反動時代に文化運動の意義をいかに強調しても、しすぎることはないのだ。しかしわれわれの間には文化運動については、実に雑多な意見が存在している。過日の文化運動批判会は、きわめて不完全なものではあったが、それは多くの意見を一つの場所に集中して表現したものであった。

そこには大体二つの異なる意見が示されていた。一つは解放文化連盟の活動がアナキズム文化——理論においても作品においても——の確立に対する努力が余りにも不十分であると言うことと、他は労働者農民の日常の政治的経済的要求と結合していなかった——それは主として、機関紙の編輯に関してであったが——という点に対する批判であった。この二つの点は確かに正しかった。だがわれわれの側における文化運動一般に対する批判としては前者が正しかったのである。文化連盟の発した一切の文学上の諸潮流に対する批判が不十分である主要なる原因は、批判の基準たるべきアナキズム文化の第一歩的な基礎さえ確立されなかったこと、すなわち意見の一致さへ見出していないことのうち存在する。ロマンチズムとの闘争、行動主義に対する批判は、今日の文学上におけるわれわれの任務ではあるが、その批判の基準たるべき革命的リアリズムさえ——その理論においてもその作品においても——確立されていないのが現状である。そこでわれわれは微弱なる現状——文学通信のみを持つこと、ブルジョア・ジャーナリズムを広汎に利用し得ないこと等——に立って、まずなすべきことは、文学通信をわれわれの文学理論確立のために最も広く利用すべきであると言ふことだ。これなくしては労働者農民の間へわれわれの影

響を持ち込むべき文学サークルの活動さえなし得ないであろう。

わずかに文学——それはほとんど詩だけだ——しか持たない文化連盟の中心スローガンは、革命的リアリズムの確立でなければならぬ。それと共に、作品活動の活発性を闘いとするべきである。そして進んでは科学、哲学等のなかにわれわれの旗を進ましめるべきである。

第二の批判も注目しなくてはならぬ。それはわれわれの革命的出版物への批判が含まれるからだ。われわれの出版物はもっともと大衆の間に歓迎されるような形式と文章とを持たねばならない。

(八) 戦争問題

われわれは戦争問題に対する明確な態度を示さねばならない。無政府主義者は帝国主義戦争に対する態度は常に自国の敗北主義でなければならぬ。しかし機械的な敗北主義は誤っている。戦争の危機が深まれば深まるほど愛国主義的幻影を拡大するための支配階級の狂奔は猛烈となる。反戦的言辭は嚴重に罰せられる。われわれはこの狂奔を利用してはならない。

防護団は工場のなかにも組織化された。われわれはこれを人民一般の武装に転化せしむべきである。「防護団」の組織のなかに帝国主義戦争の階級性をバクロし、それによって「防護団」を解散させるのではなく、労働者の指導下におくようにすることが必要である。

戦争は資本主義の恐慌からの活路となるか、あるいは労働者農民の革命的活路となるかは、われわれの闘争の如何による。その上、客観的諸状勢は、大衆の間に蜂起的諸事件の起こるべき可

能性を示しているのである。

(九) 民族問題

民族問題に対する無政府主義者の態度は、革命的民族自決主義である。ウイソソンの民族自決主義は資本家的支配を確立するに在った。しかしその意義は植民地大衆を帝国主義から解放する革命的血路に光を照した。しかしウイソソンは注意深く、資本家支配の民主的共和国か、委任統治の形式による実質的な分割を置いたのである。

無政府主義者の基本的な態度は、いかなる弱小民族も、いかなる人種をも帝国主義の支配から脱出せしめなくてはならぬ。それ故に、進歩的ブルジョアの民族主義をある時は支持するのである。例えばイギリス帝国主義に対するガンヂーの闘争をわれわれは支持するのである。イタリアのエチオピア征服にわれわれは反対する。われわれは支那の分割および帝国主義支配に反対し、中国革命への不干渉を主張する。朝鮮、台湾、満洲の日本帝国主義に対する民族主義運動にも全き支持を与えるのである。

(十) スローガン

われわれの行動スローガンは次の如きものである。

- 一、首切、賃下、労働強化、工場閉鎖絶対反対
- 二、減収によらざる労働時間の短縮

- 三、臨時工を即時本雇にしろ
- 四、生活を保証する最低賃銀の実施
- 五、健康保険の資本家全額負担と政府、資本家負担による失業保険の実施
- 六、失業者に飯と仕事をよこせ
- 七、小作料全減免
- 八、土地取上、立入禁止、たちげ立毛差押絶対反対
- 九、農民の負債を棒引にしろ
- 一〇、爾安、農産物安による損失の国庫負担
- 一一、耕作権の確立と生産費の国庫負担
- 一二、農民の自主的管理による救農事業の実施
- 一三、独占資本に対する闘争
- 一四、労働争議調停法改悪反対ならびに調停裁判絶対反対
- 一五、国庫負担による兵役者家族の保証
- 一六、一切の租税の資本家、地主負担
- 一七、青年訓練所、官僚青年団の撤廃と自主的青年団の確立
- 一八、言論、出版、集会、結社の自由
- 一九、一切の労働者農民暴圧諸法令の撤廃
- 二〇、一切の反動ファッショの撲滅

- 二二、日常闘争を通じて労働者農民の結合へ
- 二三、耕す者に土地を、工場を労働者に
- 二四、資本主義教育の撤廃
- 二五、戦争の危機に対する闘争
- 二六、議会の解散
- 二七、資本制の廃止

(終り)